

野生動物医学への挑戦—寄生虫・感染症・ワンヘルス（東京大学出版会，2021年6月4日発売，A5版 208pp，定価 2800円+税）
浅川満彦（酪農学園大学獣医学群獣医学類医動物学ユニット/野生動物医学センター）

過日、Animate 緊急企画「みんなでコロナを考える」に寄稿、予告させて頂いたように、無事、標記拙著が刊行された。徳武様のお奨めで、簡単に紹介をさせて頂く機会を得た。本書は「私は寄生虫学および寄生虫病学を専門にするが、その研究者人生の半ばで野生動物医学という別の学問を兼任（中略）感染症全般と関り、結局、野生動物医学が獣医学あるいは生物科学の中で、どのような位置付けにあるのかを模索しつつ、この分野を根付かせることに挑戦（後略）」（<はじめに>より）した記録である。その過程で、獣医学・応用動物学などの学部生（あるいは大学進学前の受験生や小中高生も）が関心のあるゼミ選びや卒論、その後の就職などについても詳細に言及した。現在の立場で、そういったご相談が多かったからである。以下に章題とその節を列挙させて頂く。

第1章 寄生虫はどこからきたか

1.1 寄生虫学事始め 1.2 研究の方向性を決める 1.3 宿主—寄生体関係の生物地理

第2章 野生動物学を教える

2.1 獣医学領域の野生動物 2.2 野生動物医学とは 2.3 より高みを目指す野生動物医学のために

第3章 野生動物に感染する

3.1 病原体と感染症 3.2 ウイルスによる疾病 3.3 細菌・真菌による疾病
3.4 野生動物の死因はなにか

第4章 鳥類と寄生虫

4.1 鳥独特の寄生虫病 4.2 原虫・蠕虫による疾病 4.3 節足動物による疾病

第5章 野生動物と病原体の曼荼羅

5.1 外来種介在によるいびつな関係 5.2 多様化する衛生動物 5.3 感染症研究の縦割りは世界を滅ぼす

第6章 次世代へいかにバトンを渡すか

6.1 まず、働かないと…… 6.2 研究と啓発の両輪で 6.3 今後に望むこと

なお、第1章の節<宿主—寄生体関係の生物地理>では、宿主モデルとして、なぜ、野ネズミ類を選んだのか、どのように研究を進めたのかなどを詳述した。その研究の展開では、本農大動物研究会の関係者としては、故・土屋先生ほか、原田先生や吉行先生に大変お世話になった。1994年、その研究で博士号の学位を得た途端、勤務

先の都合で野生動物医学の担当となったが（第2章）、故・土屋先生は面白がって、何かとご支援を頂いた。さらに、後年、やはり勤務先の都合で動物看護師を養成する学科に向向した際は、故・安藤先生にも何かとご心配頂いた。

第3章から4章については、動物園・水族館に勤務される方、また、エキゾチック・飼育鳥類の関係者はもちろん、生産動物や伴侶動物関連で活躍され、日頃の業務で感染症や寄生虫病に悩まされる方々にとって、若干、鳥類に軸足を置いているものの参考になろう。参考文献表も完備しており、独習の縁をサポートしている。

ちなみに、本書表紙カバーは、それまでの出版元の書籍らしからぬ漫画のようなタッチとなっている。描いた作家は浅山わかびという『週刊少年サンデー・洗脳執事』などを連載した漫画作家で、実は、私の娘である。この子が生まれた1994年に、私は野生動物医学の担当となったので、これも何かの縁なのだろう。



いやー久しぶりに読んでいて面白い専門書に出会いました。
科学、研究の本質を改めて教えられたように思います。

これから大学を目指す学生さん、現役の大学生さん、分野を
問わず一読を勧めます。

旭山動物園園長 坂東 元（獣医師）